「米握るわれら」

新森耀　（20 代）

「人生で心に残っている言葉は？」

「困難をどう乗り越えてきましたか？」

そんな質問を見かけるたび、真っ先に思い浮かぶものがある。“おにぎり”だ。そしてそれは、私の家族を意味する。私の家族はなぜか、よくおにぎりを握る。思い出は少しずつ曖昧になっていくけれど、ほおばってきたおにぎりの塩加減も、硬さも、温度も、全部厚かましいほど鮮明だ。

幼い頃、おてんばだった私は、毎日のように母から雷を食らっていた。何が間違っていたのか、心から反省することができた時、おにぎりは登場する。このおにぎりは塩気強め。硬めのお米がしっかりと握られた、密度の高い教育的おにぎりだ。反省が足りなければ、おにぎりは待ちぼうけをくらう。表面が乾き、冷めて硬さが増したおにぎりは、反省の気持ちを何倍も強く感じさせた。その硬さを何度も何度も噛み締めた時間は、自分の行動を見つめなおす時間でもあった。そしてもう一度気持ちを切り替えて頑張ろうと思うのだった。

最も長い時間を共に過ごしてきた母には、もう一つ恒例のおにぎりがある。海苔で巻かれた握りこぶし大の大おにぎりだ。受験期を毎日支えてくれたこのおにぎりはそこまで硬くない。しかし、とにかく大きい。そして、中には自分が食べているものがおにぎりであることを忘れてしまうほどに盛沢山の具が入っている。ハンバーグ、しゃきしゃきサラダ、鮭の切り身おそらく一枚分など。昼夜関係なく机に座り、文字ばかり追いかけていた日常で、そのおにぎりたちはお楽しみボックスそのものだった。「頑張りやー！」だとか「リラックスしいや〜」だとか言われているような気持ちになって、不思議と背中が押され、私は後悔なく全力を出すことができた。

厳格な祖父が習字を教えてくれたあとに結ぶおにぎりも母の教育的おにぎり同様硬い。一画一画にも一切の妥協を許さぬ、抜け目のない師匠の味である。優しくて芯の通った祖母が結んだおにぎりは、中に空気をよく含んでいて、それでいて崩れることがなく、長年の家事に誇りを感じる一品だ。落ち込んでいる時に祖母のおにぎりを食べると、その柔らかさに心がほどける。恋が終わって何も食べられない私に、料理下手な父が黙って作ってくれたおにぎりは、持ち上げただけで崩壊した。それはこれまでの人生で一番ちゃんとしていないおに

ぎりで、なんだか笑えた。「ありがとう」は、恥ずかしくて、崩れたおにぎりとともに一口ずつ飲み込んでしまった。そうやって、私の家族は米を握る生き物なのだ。いつだって。

私の人生はおにぎりを結ぶ人たちによって支えられてきた。節目節目のおにぎりたちは、これからも私の中で生き続ける。今、私は社会人になった。１Ｋの狭い台所、深呼吸してお米を炊く。握って進め、私。